

第5期生 卒業エッセイ

生と死

第5期生 有吉 智彦

3月27日の朝、ゼミ面接を受けるために、三田のキャンパスを訪れた。教室内に緊張した表情の将来の小野ゼミ生となる仲間がそこにはいた。あれから早2年も経っている。今、日吉のITCで原稿を書いている今も2年間の時間を刻一刻と刻んでいる。何事も終わりがあるから思い出となっていく。今の俺はずっと大学生でいたいと思うときがある。しかし終わりがなければ、一日一日を振り返ることができずに、人間は同じ過ちを犯す。終わりがあるから、生きることができる。

2年間とは短いものだ。しかし、長かったようにも感じる。とよく耳にすることがある。意味がわからない。短いと長いという言葉は対になっている。その言葉を織り交ぜて今の感情を伝えることは、ナンセンスすぎる。今の感情は短いでも長いでもないのだ。短いという点と長いという点の距離のどこかにそのなんともいえない感情があるのかもしれないし、そもそも、違う言葉で表せるかもしれない。日本人特有の曖昧な表現に過ぎないのではないか。最近、私は、2年間のゼミ生活を振り返って抱いた感情を表すことができる言葉を探している。時には、頭の中で、点と点を結びその間に焦点を絞ってその点とは何かと悩まされている。点と点は、はっきりしていてわかりやすい。ゼミが始まった2007年3月27日。ゼミが終わる2009年3月23日。始まり、終わりの気持ちを伝えることは簡単ではっきりしている。ゼミ生活の2年間となると明確な言葉で気持ちを伝えることはできない。私は今生きている。生まれた1985年4月28日。そのとき、私は、はっきりとオギャーという言葉でこの世に生まれた喜びを表現した。そして、今23年9ヶ月を生きているが、23年9ヶ月を振り返って抱いている感情を言葉では言い表すことはできない。私は今生きているのだから。私が死んだときに、自分が生きてきた生涯を振り返り、この世に生を授かって生きることができた喜びを言葉で表すことができるのではないだろうか。私は現在進行形で今を生き、大学生活の2年間を小野ゼミで過ごすことができたのは、私にとっては貴重な経験であった。学問を学び、仲間と議論することは私にとって初めての経験であった。感覚的に生きてきた私にとっては慣れない学問の話に戸惑った。サッカーにおいては私の得意分野で熱く仲間と議論した。サッカーの時と、小野ゼミの学問のときとは、全く逆の立場になった。両立場の気持ちの経験したことは私にとっては財産となるであろう。小野ゼミメンバー、森岡さんのサポートに頭が上がりませんほど感謝している。本当に有難う。そして小野晃典先生2年間本当に有難うございました。



漁船のうえで生と死について考える著者